

絵画製作の領域について

藤 田 復 生

幼児教育では、評価ということが極めてむずかしい問題であつて、中でも絵画製作という造形活動の領域については、とくにむずかしいことといえます。

いざさら、評価の重要性を説くまでもなく、教育であるからには、幾つかの目標に対して望ましい成長をしているかについて常に評価がなされていなければ、進歩も生長もみられないので、教師は常に正しい評価をおこたうことはできないものであります。

造形的に表現されたものを対象に評価する場合にしても、その活動を評価するときも、主観的な評価がされやすいので、ときには、その評価が教育上さまざまな場合もできます。

これまで、心理学的な観点からの評価の方法や、また、知能的発達との関連による評価がされてきていますが、これだけでは一方的であつたり片手おちのように思われて、造形活動のための評価とはなりにくいものです。

なぜならば、幼児の造形的な活動やその所産である表現が、幼児の性格形成だけのものではなく、また、知識の発達のためのものでもなく、人間としての造形的な創造力の芽生えを正しく生長させていくことと、美に対する豊かな感性の培養期であることをわすれてはならないからです。

幼児教育では、あらゆる場合に心理的考察をわすれてはならないものですが、これを評価の尺度とすることは間違いをおこしやすいのです。例えば、一時盛んであつた色彩を心理的に分析し、紫色を用いるのを精神上の不安や肉体的にまで病弱説をとなえたために、保育者や親まで紫ノイローゼにおちいったことがあります。紫色を使った画や作品を、造形的角度から観るならば必ずしもこれを否とすることはありません。また、経験期の教育からいうならば紫色を使わなければ、紫色の美しさや、他の色との調和感も生長することがないといえるのです。

また、幼児教育における評価の要点は、その表現された所産に対しての評価ではなく、幼児のもつ、あらゆる可能性と過去の経験の集積の結実を評価し、なお将来の予測の上になつて評価しなければならぬので、第三者としての評価が困難であると思われまふ。

では、誰が評価をなし得るかという点、その幼児の親と教師であることは言うまでもありませんが、その親やその教師が十分な能力と経験を持つことが前提となります。親の場合は多くの幼児の活動や、表現を総体的に見ることが少なく、自分のことを中心とするために適当であるといわれまふ。

教師は多くの幼児に接し、教育を専門とする立場からは、最適者ですが、これもいくつかの条件を持たなくては、適任者にはなれないのです。

第一に、子どもをよく知らなければならぬ。

これは教師として当然ですが、主観的、先入観を持たない、客観性にもとづいた考察によつて、理解することです。

第二に、教師自からが創造性を持っていなければならぬ。

芸術家の創造性を持つ、とまでは言わないが、幼児と共に創造する教師であり、子どもと自己同一化し創造することのできる必要です。

第三に、教師が美的感性を持っていなければいけない。

美とは何であるかなど、哲学的に追求すれば、むずかしいことですが、素直な気持ちで美に感動し常に美に対する敬虔な追求者であることが必要であつて、美的感性は天性ばかりでなく、習練によつて

高められていくことができるものといえます。

この三つの条件は、幼児教育者として必要であるとともに、造形活動とその表現を評価する必要な条件であるといわなくてはなりません。

第一の条件を、さらに、造形教育の立場から説明しますと、

幼児の造形的発達を系統的に熟知することで、造形の段階的評価の一つの尺度とすることができます。

造形的発達については、その文献や資料も一般にあきらかにされていますので、ここでは再び述べることを避けますが、この発達基準の尺度は、現代の幼児の発達にあてはまるとは限らないで、これはあくまでも基本的な段階の基準とすべきもので、これを基として、現実に教育する目前の幼児の中でこそ、その発達を知り発見することこそ大切です。

幼児は、その天性の素質と、環境、経験の多少によつて、一人ひとりが異なり、或る者は段階を飛躍し、或る者は教師の気付くことなく進み、或るいは時の来るまでである段階にとどまるように見えますが、これらの千差ある幼児を総合的に見つけながら、その時々になされる評価こそは、教育上の重要な評価といわなければなりません。

次に、造形教師の目的とその目標のいくつかを、正しく把握しておくことです。

V・ローウェンフェルドは、「美的作品は、造形活動の結果として、創り出されるが、感情・知覚、思考を完全に統合して、表現と

「いう一つのまとまった調和のある状態へと成長していく。」といっています。これを、具体的に敷衍し目標を明確にしますと、

一、自己表現の表出によって、情緒感を育成し、視覚と感性との統合によって、美的感情を高めていくこと。

二、造形活動とその表現をおして、形体・色彩・質量などの感覚をたかめていくこと。

三、知覚・思考によって素材・用具に対する適応力をつけていくこと。

四、感情・知覚・思考、を統合して表現力と伝達性を養っていくこと。

五、個々の性格と特性を表現に生かしていくこと。

ですが、更に評価の観点としての項目をあげてみると、

一、造形意欲（造形活動への意欲・興味への度合と、活動中の熱意の度合）

二、創造能力

自己表現（想像と生活経験の表出の度合）

表現力（表現量と内容発展の度合）

構成力（単純構成・複次構成・変化構成・統合構成の進歩の度合）

色彩感（単純色彩・複雑色彩・統合彩色への調和的發展の度合）

（合）

感覚力（視覚・感覚をとおしての造形表現の度合）

適応力（素材・用具の使い方とその生かし方）

三、美的感性（自然・造形物への美的関心・感動の表れの度合）

四、個性表現（強靱・雄大・繊細・華麗・温和感情的・動的・静的などの表れ）

以上は、造形活動を全般的に評価するもので、描画から立体的な表現、または、砂・積木に至るすべての造形活動の評価の要点となると思います。

造形表現を字句で表現するのは、至極むずかしいことなので理解されにくいと思われませんが、その人なりの解釈にまつよりしかたがないで、その人なりの表現を用いる方がよいと思います。

次に幼児の描画表現には、幾つかの特質をもっているため、これらの特徴を理解しておかなければ正しい評価はできないので次にあげておきます。

表現形式の特質

一、天地空間形（例、天地間にものを描くなど）

二、空想表現形（例、月に梯子をかけるなど）

三、自己主張形（例、自分を大きく描くなど）

四、透視表現形（例、家中が透けて描かれるなど）

五、移動視点形（例、遠近・大小の比率がないなど）

六、羅列表現形（例、同じものや関係あるものを並べるなど）

七、経過表現形（例、時間の経過を描くため最後にぬりつぶし夜になってしまふなど）

八、強調表現形（例、印象的なものが中心になるなど）

九、積上表現形（例、下部から上部へ積み上げて描くなど）

十、展開表現形 (例、机などの足を四方に描くなど)

十一、変形表現形 (例、人物の頭から、手足がでていているようなものなど)

これらの特質は描画に表れてくるのですが、これらのどれかの部に属する点が幼児の絵に見られます。これは幼児にとっては極く自然な表現として受けとらなければなりません。これが、徐々に変化していくところに進歩が見いだされるといえます。

また、他領域との関連評価も、協調性、観察力、整理などの評価点もありますが、造形指導の評価点は多面的に多角的に評価することが必要であって、現在の指導要録の評定項目の、

- ・喜んで絵をかく
- ・喜んで物を作る
- ・喜んで絵や物を見る

だけの観点では、造形指導のためには評価の役にたつとはいえません。(指導要録も改正になります)

幼児のための評価は、一人ひとりの幼児の指導に必要なものではなく、教育上の指導評価ですから、他の幼児との優劣評価ではなくその幼児の進歩の過程を常に評価し、それによって、教師は指導の反省とし、幼児の成長の表れとしてながめて行かなければなりません。

評価表も月に一回、或るいは、少なくとも学期末ごとに、自分で考えた評価観点の高低のグラフと全般のプロファイルを観察してみるものが大切です。

そこには、成長のバランスや、遅滞、進歩の姿と速度が見られるはずでず。

最後に少し、具体的な評価の留意点を述べてみましょう。

造形評価の要点を正確に把握していない教師は、一般に、きれいに描かれた画や、手ぎわよくでき上った物について、高い評価をしやすいのですが、人間の巧緻性や器用性には先天的に差が多いので、巧みにつくられたもの、きれいに描かれたものが、造形的に望ましいものとはかぎりません。

不器用な表現の中にも、幼児の真実があるもので、これこそが造形性の本体ですから、これを見逃がしてはなりません。

幼児の造形表現は体あたりで表現されるので、そこが一般のおとなの絵と違い、おとなのつくったものとの違いです。

一見粗雑な表現に見えても、力の充実した表現もあるし、ただ勢にまかせた表現もあるのでそれが見分けられなければなりません。

また、色数が多く使われたから、造形的に進歩したものとは限りません。その表現の中に、調和感が成長しつつあるかが大切な観点であって、東洋画の墨画の美しさも、色彩豊かな洋画とくらべておとるものではないことを知らなければなりません。

調和とは、統一と変化、均衡、強弱、流動など含まれたなかに、ある秩序が見いだされるもので、造形活動の進歩にしたがって、これらの要素が成長してくるのです。

幼児の造形表現は、幼児のすべてを投入した世界ですから、そこ

に、その幼児が生きていくべきものです。したがって個性もその中に存在するはずで、ただその表れが、強く表れるか、極く微弱であるかは、表現の自信と能力にかかっているので、徒らに否定的評価をしてはなりません。自信と能力を与えるのは教師の指導にかかっているといえるものです。

良き指導者のもとでは、幼児の造形能力はすばらしい表現力を発揮するものです。その可能性は無限ともいえましょう。また、秀れた指導者は、正しい評価をし得る者で、幼児の創造性や美感を、過少評価してはなりません。

「幼児の純粹な心は、幼児なりに本質にふれていることを、知るべきでしょう。」

幼児の作品に向かったら、先ず評価することをわすれ、心を無に

||||| 幼児教育における評価 |||||

リズムミカルな運動の分析

して見つめることです。その中に、その幼児の姿が見え、次に評価すべき良さも、欠けた点も感じられてくるものです。これは鑑賞の態度と同じで、はじめから、評価点を見いだそうとすると何かの概念にさまたげられて、正しい評価ができなくなるものです。

このような気持で数を重ねていくうちに、直観がはたらくようになり、評価力も生まれてくるのです。

また、作品から、その幼児の活動状態も感じられるようになるし、幼児の作品の中から美しさが感じられるようになるはずで、造形に対しての鑑賞、評価は、その人がある程度の造形的教養をもつことによってできるのですから、幼児教育にたずさわる我々は、常に自から創造性と美的感覚の練磨をおこたらぬようにしたい

ものです。

(ゆかり文化幼稚園長)

戎 喜久 恵